

# 京のみどり

No.117

2025 冬

特集

三栖神社の炬火祭

たいまつ

生物多様性と

文化について考える

京のまちに雨庭をつくろう！

世界的な水理実験施設に、雨庭が完成

三栖神社 炬火祭〈神幸祭〉(伏見区)



# 三栖神社の炬火祭 生物多様性と文化について考える

京都市伏見区の三栖神社で毎年開かれる炬火祭。紆余曲折を経てこの地域に復活し、伏見の秋の風物詩となったこの祭り、またその炎を灯すヨシという植物を通して、生物多様性と京都の文化の関わりについて考えます。



## 祭りの歴史と ヨシの恵み

伏見の秋夜を赤く染める炬火たいまつ

長く続いた猛暑が終わり、夜風が涼やかさを取り戻した10月12日。京都市伏見区の竹田街道は、巨大な炬火（たいまつ）の炎に照らされていました。この日は、1年に一度開かれる三栖神社の秋季祭礼の日。神幸祭の御神輿巡幸の先導として、ヨシでできた全長約4m、直径約1.2m、重量約1tの巨大な炬火に火が付けられ、32人の男衆（担ぎ手）によって担がれます。

「アーヨイヨイヨ」の掛け声と祇園囃子ほこの中を、ゆくりと進んでいく巨大な炬火。沿道は見物客で埋め尽くされ、その姿を収めようと無数のスマートフォンが向けられます。

「炬火祭」と呼ばれるこの祭りの起源は、672年の壬申の乱にさかのぼります。近江朝廷と戦うべく、大海人皇子（天武天皇）がこの地を通過した際、住民たちが炬火を灯し、暗夜を照らして皇子を歓迎したという伝承によります。1996年には、京都市登録無形民俗文化財にも登録された、伏見を代表する伝統行事の一つです。

祭当日、炬火は三栖神社の御旅所（金井戸神社）に奉納され、お祓いを受けられます。宮司から授かる種火を「手炬火」という細いヨシの二つの束に移し三栖会館前まで練り歩きます。20時になると担ぎ手が担いだ炬火に点火。巡行道中は適宜水がかけられ、炎の勢いを調整しながら多くの見物人とともに北上。担ぎ手を炎から守るためにつけられた芒すすきの束は「火除け」のご利益があるとされ、落ちたものを競い合うように拾い上げ、持ち帰る人の姿も目立ちます。約15分の巡行を終えると火が消され、残った炬火の一部は近隣農家で畑の敷物や肥料として活用されます。

※三栖・炬火会は、2022年に祇園祭巡行に復帰した「鷹山」の保存会と協力関係にある。鷹山の鉾建てを荒縄で行う「縄がらみ」に協力。

一方、鷹山からはお囃子の指導を受け、炬火祭で用いている。



「三栖・炬火会」内藤健次さん

## 1300年の伝統を現在に受け継ぐ

## 炬火祭復活の歴史

1300年以上の歴史を持つこの祭りを受け継ぐ三栖神社の氏子たち。そのとりまとめ役の一人が三栖・炬火会の内藤健次運営委員長です。古来、1954年まで続いた炬火祭ですが、戦後復興期に伝統的な農村共同体が弱まり、祭りの担い手が減少したことでその歴史が途切れました。「炬火をつくるだけで、延べ5000人<sup>にんぐ</sup>の人手が必用。それまでは農業の合間に行っていた祭りの準備が、会社勤めの人が増えたことでできなくなりました」と内藤さんはその要因を語ります。

約35年に渡って中断されましたが、三栖二丁目から四丁目の「浜三栖」と呼ばれる地域の若者たちの手によって、1989(平成元)年に復活しました。当時、祭りを経験した世代がまだ健在で、「何とか継承に間に合った」といいます。「この辺りは昔の漁師町。船頭が多く住むことから『浜三栖』と呼ばれていた。祭りの復活、その後の段取りも浜三栖の者でやってきました

が、その後、三栖神社周辺の氏子を加えた地域全体が関わる『皆の祭り』になりました(内藤さん)。



1954(昭和29)年の炬火祭巡行の様子

## 地域の誇りを、未来に

神社との打ち合わせや、炬火づくり、警備の分担や警察・消防・救急との調整など、委員会の役割は多岐にわたります。「少子高齢化が進み、また核家族化によって町内を出る若者も増えました。新しく移住してくる人たちもいますが、中心となって祭りの運営を担う氏子の数は不足しています」と、存続の危機について語る内藤さん。それでも祭り当日、周囲に檄を飛ばす<sup>はっちゅう</sup>澆<sup>はっちゅう</sup>とした表情には、炬火祭に対する愛情と誇りがにじんでいました。「『たいまつ祭り』は他にもあるようですが、『日本国語大辞典(日本大辞典刊行会編集、小学館発行)』で『たいまつまつり』と引けば、一行目に『京都市伏見区にある三栖(みす)神社の祭礼と書かれています。日本を代表する三栖神社の炬火祭を復活させ、今に伝えていることが私たちの何よりの喜びであり、誇りです』と胸を張ります。



神輿とともに三栖の町内を練り歩く

## 祭りを支えるヨシとは

炬火祭の主役となる炬火作りについてもうかがいました。三栖神社の炬火祭では、伝統的に宇治川流域に自生するヨシで炬火がつくられてきました。「鞍馬の火祭は木材が使われていますが、この周辺は宇治川やかつての巨椋池



「火除け打ち込み」の作業風景

分的に組み上げ、1か月がかりでようやく完成します。

ヨシはイネ科の多年草で、湖や河川、湿地、海と川の水が混ざる汽水域などの水辺に自生しています。毎年4月下旬から芽を出し、7月下旬まで草丈が2〜3m、長いものでは5mまで成長するものも。炬火祭が行われる秋には穂をつけ、やがて枯れはじめます。

地中に地下茎を伸ばし、大きなヨシ原(ヨシ群落)を形成する点もヨシの特徴で、水をきれいにする、魚や鳥の棲みかになるという役割も担っています。人間にとっても身近な植物であり、中空構造で軽く、丈夫な茎の部分は、葺<sup>ふ</sup>や茅葺屋根などの材料として使われてきました。

かつてはいたるところに自生し、日本の水辺の景観を形成してきたヨシ群落ですが、河川整備などが進む過程で姿を消しつつあります。宇治川の河川敷一帯は今なおその姿をとどめています。内藤さんによればその規模は年々縮小の一途をたどっています。「炬火祭は、宇治川のヨシ原があつてこそ続いていた祭り。ヨシ原を保全しなければなりません」と、危機感を募らせています。

## お話を聞いた人

三栖・炬火会 運営委員長  
内藤 健次さん

一度途絶えた炬火祭を復活させた当事者の一人。以来祭りを支え、2021年から運営委員長を務める。

三栖神社祭礼実行委員会HP  
<http://misu.future-support.net/>



# 「宇治川のヨシ原を守るネットワーク」山崎洋一さん 文化・生活を支える伏見のヨシ原を守るために

## ヨシを循環させる「ヨシ焼き」の存続

持続可能性が危ぶまれる宇治川のヨシ原。その保全活動を行う「宇治川のヨシ原を守るネットワーク」の山崎洋一さんにお話を伺いました。山崎さんによれば、かつて伏見・中書島一帯には「ヨシ屋」が集積し、商用利用の過程でヨシ原の定期的な手入れが行われてきました。中でも『ヨシ焼き』と呼ばれる野焼きは、枯れたヨシを焼き払うことで雑草や病気を防ぎ、灰が肥料の役割を果たして新芽の生育を促します。また、成長を妨げるものが焼かれてなくなるため、祭礼や商いに適した、元気で真っすぐなヨシが育つ利点もあるといいます。

「ヨシ焼き」は、宇治川河川敷で毎年春に行われてきましたが、2010年に発生した煙による道路への影響が問題視され、中断を余儀なくされました。この事態を受け、ヨシ原の手入れを行う業者や市民が中心となり、ヨシ焼きが生育や生態系に果たす役割、地域文化財（三栖神社の炬火祭り）との関わり、西日本最大のツバメのねぐらであることなど、ヨシ原の価値を広く発信。その結果、2013年



観月橋の下流およそ3kmに渡って広がるヨシ原

## 地域の自然に目を向けてほしい

からヨシ焼きが復活することになります。その後も中止・再開を繰り返す中、2025年3月に文化庁「ふるさと文化財の森」に「伏見宇治川茅場」が認定されたことが大きな追い風になりました。この制度は、伝統文化財の保存に不可欠な植物性資材（木材、檜皮、茅など）の安定確保を目的としており、今回の認定によりヨシ焼きに対する補助金が交付されることになりました。

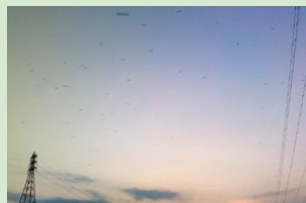
「ヨシ焼き」の存続に加え、流域の環境の変化にも注意を向ける山崎さん。1965年の天ヶ瀬ダム稼働後、宇治川の水位が安定したため、ヨシの生育適地の水陸移行帯が大幅に減少したのです。ヨシが生育する水辺が狭まり、より水辺から離れた場所に生えるオギが増加。見た目こそヨシと似ていますが、オギの茎は空洞ではないため、ヨシのような活用は見込めません。山崎さんは「水位が回復しなければ、10年後にはほとんどがオギに代わる可能性がある」と警鐘を鳴らします。さらに、人の手が遠のいた河川敷の植生変化に伴う樹木、ツル植物の繁茂も、ヨシの生育環境を脅かしています。

「ダムや堤防、河川の整備などは、社会の安全にとって是不可欠でも、生物多様性という点からはそうと限りません。例えば、使用頻度の減った施設をヨシ原に戻すだけでも、状況は好転するはず。そうした動きを起こすためには、まずは地域の生態系や生物資源に目を向け、歴史や文化との結び付きを知ってもらうことが重要だと思います」と山崎さんは訴えます。

## ツバメのねぐら

宇治川のヨシ原は、西日本最大の「ツバメの集団ねぐら」としても知られています。渡り鳥であるツバメは、毎年春に日本に飛来して繁殖し、秋になると東南アジアなどの温暖な地域に移り、越冬します。宇治川の南側に広がる大きな干拓地（水田地帯）が軒先などで子育てを終えたツバメ達の絶好の餌場となっており、集まったツバメはここで次の渡りに備えて栄養を蓄えます。

その数は数万羽に及び、真夏の盛りの夕方には空を覆わんばかりにツバメが集まり、一斉にヨシ原に飛び込む「ねぐら入り」を行い、風に揺れるヨシの上で身体を休めます。集団で外敵から身を守るために、ヨシは絶好の隠れ家としての役割を果たしているのです。「宇治川のヨシを守るネットワーク」は、ヨシ原に生息する多様な生き物の調査・保全活動を行っており、ツバメの調査もその一環。ヨシとツバメが調和する風景には一見の価値がありますが、その数は年々減少しているという調査結果もあるため、今後も静かに見守りたいものです。



夕焼けのヨシ原にツバメが集団で舞い降りてくる

## お話を聞いた人



宇治川のヨシ原を守るネットワーク 代表

山崎 洋一さん

2024年3月より新たな体制となった「宇治川のヨシ原を守るネットワーク」で、ヨシ原やその周辺の生物保全の活動を行う。

宇治川のヨシ原を守るネットワーク HP  
<https://ujigawa-yoshihara.jimdofree.com/>



# 花とみどりの 相談所

草花や樹木の育て方など、「緑」についての  
さまざまな疑問に専門家がお答えします。  
窓口（梅小路公園内）のほか、電話による相談も  
お受けしています（いずれも無料）。  
詳しくは裏表紙をご覧ください。

## レモンの育て方

**Q** 京都府内産のレモンが青果店やスーパーで売られるのを目にするようになりました。気候の温暖化で京都でもレモンの木がよく育つようになったのか、園芸店で苗木を見かけたので購入し、8号鉢で育てています。「植え替えが必要」と言われましたが、いつ植え替えを行えばよいでしょうか。また、花は咲くのですが、実が成らないのはなぜでしょうか？



**A** レモンはミカン科ミカン属の常緑高木で、寒さに弱い植物です。しかし、最近の暖冬傾向により、京都でも育つようになりました。

植え替え時期は3月に入ってから行いましょう。鉢は10号鉢以上にします。**3年に1回は植え替え**を行ないます。大きく育てる場合は、その都度、鉢を大きくします。

また、実が成らないとのことですが、レモンは雌雄同株<sup>※</sup>で、昆虫が少ないと結実が悪くなります。開花時に柔らかい筆を用いて人工受粉を行うと、よく結実します。

そのほかの栽培のポイントをまとめました。

### 摘果

一枝に小さな実がたくさん出来た場合は摘果し、一枝に一個にします。

### 水やり

水やりは土が乾いたら鉢底から水が出るくらいに与えます。

### 肥料

2月に寒肥として緩効性の柑橘用の錠剤肥料を与えます。また、果実が大きくなり始める6月と9月に追肥を行い、収穫が始まった11月頃にも追肥を行います。

### 剪定

剪定の適期は3月ですので、その時期まで待ちましょう。枝の途中で長さを切りそろえるのではなく、「透かし剪定」（いくつかの枝の中から切除するものを決めて、その枝の分岐点近くで切る方法）を基本として行います。

### 防虫対策

果樹の夏季はどうしても虫がつくのでオルトラン等の薬剤を使って防虫します。薬剤を使用しない場合は、3月～10月頃の間、樹高よりも長い支柱を4本立て、その上に防虫ネットをかけると虫が寄り付かなくなります。

### 挿し木繁殖

自宅でレモンの木を殖やすには、暖かくなり始める3月頃、挿し木で行うと良いでしょう。枝を15～20cmの長さに切り、5～6時間水に浸けた後、鹿沼土が入ったビニルポットに挿します。植え付け後は明るい日陰に置き、土が乾燥しないように管理すると発根します。

（花とみどりの普及員 駒井修）

※雌雄同株……1つの株に雌花と雄花をつけること。

## 自然の恵みと京の文化

### 京都の火祭り、送り火に不可欠な植物

炬火祭りのヨシと同じく、他の京都の火祭りも自然資源を活かして営まれます。京都の三大奇祭の一つである「鞍馬火祭」や、京都北部の山村に伝わる「松上げ」においても、祭りの松明や篝火の材料はすべて付近の里山林から調達されます。

また、郊外の葬送地での万燈の風習を起源とする五山の送り火も、市内を囲む山々そのものが祖霊を送る儀礼の場として利用されています。八坂神社の「白朮詣り（をけら詣り）」は、ヒノキの削掛とキク科多年草のオケラを加工した生葉ジャクジュツが焚かれます。

また、郊外の葬送地での万燈の風習を起源とする五山の送り火も、市内を囲む山々そのものが祖霊を送る儀礼の場として利用されています。八坂神社の「白朮詣り（をけら詣り）」は、ヒノキの削掛とキク科多年草のオケラを加工した生葉ジャクジュツが焚かれます。



鞍馬の火祭り



五山の送り火



八坂神社の「白朮詣り（をけら詣り）」

他にも京都の伝統的文化の多くが自然の恵みと人々の営みによって育まれました。近年では里山利用の衰退やシカの食害、気候変動といった要因により、これらの資源は質・量ともに低下し、その継承が危ぶまれています。しかし、地域特有の文化的な営みは、その土地の豊かな

### 「京都の文化」の継承と生物多様性

生態系や生物多様性と深く結びつき、互いを育んできた歴史を持っています（生物文化多様性）。こうした結びつきを未来に継承するには、里山での有用植物の再生、増えすぎたシカ対策と同じく、河川敷も生態系の維持・再生の活動が不可欠です。行政や地域、そして市民が協働してこれに取り組むことが、「京都の文化」の継承に繋がるのです。

※参考「京都市生物多様性プラン」「京都府生物多様性地域戦略」



3月に行われる「ヨシ焼き」、2026年は復活する予定。



ヨシの新芽5月の様子。





グリーンインフラ

京のまちに

第37回

# 雨庭をつくろう！

あめにわ  
雨庭とは？

雨水をすぐ下水に流さずに一時的に貯留し、時間をかけて浸透させるための植栽空間。雨水の流出抑制やヒートアイランドの緩和などの効果が期待されることから、近年広まりつつある「グリーンインフラ」の一つとして注目されています。

このシリーズでは、現代都市が抱える多くの環境問題の解決策として注目される「<sup>あめにわ</sup>雨庭」とグリーンインフラ（自然環境が有する多様な機能を、環境・経済・社会の様々な課題解決に活用する、防災・減災を含む社会資本整備や土地利用）についてさまざまな視点で考えています。

## 世界的な水理実験施設に、雨庭が完成

——京大防災研宇治川ラボの新しい試み



【写真1】防災研宇治川ラボに完成した雨庭（2025年10月撮影）。



【図】三川合流地域。丸印は防災研宇治川ラボを示す。

### 伝統的な水制工法を アートに

ややもすると厄介者とされる雨。でも雨樋をアートにすれば雨を楽しめます。ここでは聖牛（せいぎゅう）の形態にヒントを得たとのこと。

聖牛とは、江戸時代に全国に広まった伝統的な水制工法の一つで、丸太を組み合わせ、重しとして蛇籠を乗せた透過型です。

### 氾濫原の植物などを みんなで植栽

2025（令和7）年6月2日、大学関係者や地元の人々などを含む約25名が、ミノハギ、カワラナデシコ、トウテイラン（以上3種、写真2）、オミナエシ、コオニユリ、アヤメ、シマカンズゲなど氾濫原の植物を含む苗を植栽しました【写真3】。

この雨庭には、雨樋アートと降り井（ふりい）という二つの新しい試みが盛り込まれています（設計／阿野晃秀、設計監修／森本幸裕）。

京都市伏見区の宇治川右岸にある京都大学防災研究所宇治川オーブンラボ（以下、防災研宇治川ラボという）は、洪水リスクの高い三川合流地域にあります【図】。

川池健司教授と和田桂子特任教授のプロジェクトとして、京都市都市緑化協会が協力し、防災研宇治川ラボ本館脇に雨庭が整備されました（面積26㎡）【写真1】。



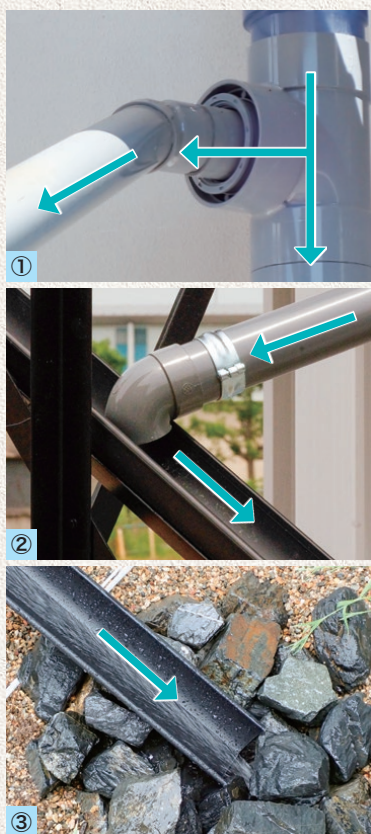


【写真3】 参加者全員で、苗を植栽 (2025年6月2日)。



【写真2】

- ①ミソハギ
- ②カワラナデシコ
- ③トウテイラン



【写真5】 雨樋アート。①本館の屋上に降った雨水の一部が左側の分岐に入り、②分岐は雨樋アートの雨樋の上部に開口し、③雨水は樋の流れ落ち雨庭に浸透する (降水模擬実験の様子)。



【写真4】 防災研宇治川ラボのモデル聖牛。



【写真6】 降り井のモデル。

川の流れを弱め、土砂の堆積を促し、結果として水生生物の生息環境にも貢献します。防災研宇治川ラボには、モデル聖牛が展示されています【写真4】。近くの木津川には、10基余りの聖牛が試験的に設置されています。防災研宇治川ラボ本館の屋上に降った雨を下水に流す縦樋を分岐して、この雨樋アートの聖牛の頂上部に導いています【写真5】。

## 京の庭園技術「降り井」のイメージを再現

雨庭の中央付近には、降り井のモデルがあります【写真6】。降り井は、地面を広く深く掘り下げ、その底に井筒が設けられた半地下式の井戸です。井筒の中に湧き出す水を利用するために、人が穴の中に降りるので、「降り井」という呼び名があります。

江戸時代後期の歴史家・思想家である頼山陽の書斎兼茶室であった山紫水明処に降り井があります。山紫水明処は鴨川の西岸にあります。この降り井は、「市街地拡大のためのお土居の撤去後の鴨川氾濫被害の頻発に対応するために、巨大な雨水浸透装置として作られたものである。」と、京都大学名誉教授の森本幸裕都市緑化協会理事長は考えています。

雨庭の竣工にあたり、川池氏から「防災研宇治川ラボに、内水氾濫を押さえるための雨庭を完成した意義は大きい」、和田氏から「多くの人々の協力で完成したこの雨庭を、流域治水と水環境保全の融合のための実験施設として活かしていきたい」とのお話を伺いました。阿野氏からは、「細長い小さな空間に、雨庭の魅力をぎゅっと詰め込んだ世界が出来上がりました。皆様への感謝とともに、研究・普及施設としてこれからの展開に期待しています」とのコメントをいただきました。

世界的な防災研究の地にできた雨庭は、グローバルに日本の伝統工法を発信する大きな役割を果たすでしょう。

(注) 京都大学防災研究所宇治川オープンラボラトリーは、1953年に京都大学防災研究所宇治川水理実験所として設置され、その後施設を充実し共同利用施設となり、2002年に現在の名称に変更されました。河川、湖沼、海域の防災に関する各種の実験装置を備え世界有数の規模を誇ります。敷地内には約50m四方の「1/200巨椋池復元ピオトープ」があり巨椋池周辺の植物を保全しています。

### 【参考資料】

- ・京都市都市緑化協会、山紫水明処(頼山陽書斎)の庭 <https://www.kyoto-ga.jp/greenery/kyononiwa/2009/09/teien002.html>
- ・本シリーズ第16回(本誌94号=2020年春号) <https://www.kyoto-ga.jp/greenery/kyonomidori/digibook/094/#7>



# 協会 掲示板

詳細は  
こちら!



○天候、感染症の状況等により、中止や内容変更となる場合があります。  
○会場へは市バス・地下鉄、JR西日本などの公共交通機関をご利用ください。

## 梅小路公園 京の庭講座 (全3回)

京都が誇る日本庭園について、3人の造園家が様々な視点から解説し、庭園を観る面白さを学ぶ3回シリーズの講座です。



### 【日程】

- 第1回 庭園の植栽 1月22日(木) 10:00~12:00  
駒井修(都市緑化協会 花と緑の普及員、1級造園施工管理技士)
- 第2回 庭園の歴史と特徴 2月6日(金) 10:00~12:00  
武田純(英国チェルシーフラワーショー最優秀賞受賞)
- 第3回 現代の庭づくり 2月19日(木) 10:00~12:00  
井上剛宏((株)植芳造園会長、京都府造園協同組合顧問)

【参加費】 4,500円(3回分)

【会場】 梅小路公園「緑の館」イベント室、「朱雀の庭」

【申込方法】 協会HPイベント情報から申込フォームで。  
又はFAX(075-352-2561)

【問合せ】 075-352-2500(梅小路公園管理事務所)



## 梅小路公園をよく知るツアー

開園30周年を迎えた梅小路公園では、説明や体験を通して公園をより知っていただくツアーを行っています。

1月、2月のテーマは「市電から見る京都のまちづくり」。梅小路公園には、レトロなチンチン電車(路面電車)が、今でも運行させながら保存(動態保存)されているほか、各年代の車両が総合案内所、市電ひろばのショップ&カフェなどに活用されています。



### 【日程】

- 市電から見る京都のまちづくり 1月27日(火) 13:30~15:30  
市電から見る京都のまちづくり 2月17日(火) 13:30~15:30

講師:寺田裕美子(都市緑化協会 花と緑の普及員)、  
梅小路公園市電ボランティアの皆さん

【集合場所】 「緑の館」イベント室(園内をご案内)

【参加費】 各回500円

【申込方法】 協会HPイベント情報の申込フォームから。  
又はFAX(075-352-2561)

【問合せ】 075-352-2500(梅小路公園管理事務所)



## 円山公園

## 歴史・文化・環境セミナー

「京都の放置竹林問題 竹をもっと知る」

京都の放置竹林問題と解決策(竹の活用等)についての市民向けのセミナーです。

(円山公園では、高校生、大学生を主体にした、放置竹林の竹材を使った竹あかりイベントを2024年から12月に実施しています=写真。)



講師: 国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所関西支所  
森林生態研究グループ 研究員 小林 慧人氏

【日程】 1月17日(土) 15:00~16:30

【会場】 知恩院 和順会館(東山区林下町400-2、円山公園のすぐ北)

【参加費】 500円(高校・大学生無料)

【申込方法】 協会HPイベント情報の申込フォームから。  
又はFAX(075-561-1675)

【問合せ】 075-561-1350(都市緑化協会)



## 京都の庭園技術「御所透かし」の技法も使ったマツ手入れの実演

「御所透かし」とは、京都御苑内の園路などから見えるマツを、独特の長柄の鎌を使い、手早く効率的に、しかも比較的長く自然な樹形を保つように、昭和前期に活躍した宮内庁出入りの庭師と担当官たちが確立した手入れの方法です。



御所透かし用の長柄の鎌

円山公園にとって、マツは景観的、歴史的に重要な樹木です。かつての地名「葛真原」は、平安時代の高僧、慈円(慈鎮)が寂寥としたマツの名所として和歌に詠み、歌枕になりました。

今回、京都府造園協同組合に加盟する造園業者により、円山公園のマツを使い、「御所透かし」の技法を使った手入れ方法を継承し、一般の方に広く知っていただくため、実演(デモンストレーション)と解説を行います。円山公園では、当協会と同組合が協力し、植物保全管理の中で、京都の庭園技術の継承、普及に関する取り組みを行っています。

【日時】 2月24日(火) 10:00~12:00(雨天翌日)

【場所】 円山公園「ひょうたん池」付近



今月の表紙

三栖神社の炬火祭。炬火の光が闇を照らし、厳かな祈りを今に伝えます。(撮影 2025年10月)

京都市  
緑のボランティアセンター  
専用窓口のご案内

お気軽にご相談ください! 電話による相談  
(梅小路公園内専用回線)※転送される場合があります。  
TEL075-352-2535

無料 草花や樹木の手入れ方法など  
「みどり」に関する質問に

電話相談もお受けしています

相談員がお答えします! TEL075-561-1980 (直通)

- 梅小路公園「緑の館」2F
- 受付 9:00~17:00 ※月曜を除く毎日 (12/28~1/4 休み)
- 京都市建設局みどり政策推進室  
緑化推進担当 TEL:075-222-4114  
(公財)京都市都市緑化協会 TEL:075-561-1350

- 毎週水・土曜日 (12/28~1/4 は休み)
- 10:00~12:00
- 13:00~16:00
- 梅小路公園「緑の館」2F 相談ブース

詳細はこちら



Instagram

宝が池公園  
子どもの楽園



@takaragaik  
kodomonorakuen

梅小路公園  
(京都府緑化協会)



@kyoto  
umekojipark



@maruyama  
kouenkyoto



2025年 12月発行  
公益財団法人京都市都市緑化協会  
〒605-0071 京都市東山区円山町463  
TEL:075-561-1350 FAX:075-561-1675

Webサイト



https://www.kyoto-ga.jp/

